

2020年度（2020年9月）卒業アンケート結果について

※数字は実数

2020年9月卒業生50名のうち、42名から回答（84%）があった。

I 専修言語について

専修言語	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	日本語	合計
	5	0	0	0	0	38	42
1.あなたが専修言語以外に学んだ言語は何ですか。(複数回答可)	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	日本語	
	25	0	0	8	3	9	
	その他	未選択	無回答				合計
	2	0	5				52
<その言語を学んだ期間>	1年春学期 ～1年秋学期	1年春学期 ～2年春学期	1年春学期 ～2年秋学期	1年春学期 ～3年春学期	1年春学期 ～3年秋学期	1年春学期 ～4年秋学期	
	8	1	0	0	1	0	
	2年春学期 ～2年秋学期	1年春学期 のみ	2年春学期 のみ	2年春学期 ～3年春学期	3年春学期 ～3年秋学期	4年春学期 のみ	
	5	0	3	1	0	1	
	1年春学期 ～4年春学期	3年春学期 のみ	3年秋学期 ～4年秋学期	3年春学期 ～4年秋学期			合計
	3	3	2	13			41
2.あなたが学んだ研究プログラムは何ですか。(複数回答あり)	①多文化国際理解プログラム	②航空/観光ホスピタリティプログラム	③翻訳・通訳プログラム	④国際ビジネスプログラム	⑤英語専門職プログラム	⑥比較社会文化研究プログラム	
	11	1	3	4	3	0	
	⑦ヨーロッパ研究プログラム	⑧アジア研究プログラム	⑨日本研究プログラム	無回答			合計
	0	5	15				42

専修言語以外に学んだ言語の回答をみると、英語が25人（59.5%）と最も多い。9月の卒業生の多くは留学生で、日本語以外の外国語を学修する余裕あるいは必要がなく、あえて第2外国語を選ぶとすれば、英語に集中したものと考えられる。

本学では2つの言語の学修を推奨しているが、第2言語を学修した期間を問う回答では、「1年春学期から1年秋学期」が8名、「2年春学期から2年秋学期」が5名、「3年春学期から4年秋学期」が13名であった。これは回答者の多くが留学生であることから、2年次、3年次編転入学が多いことと関係していると思われる。

学修した研究プログラムをたずねる質問では、複数回答ではあるが、多文化国際協力プログラム（11名）と日本研究プログラム（15名）の回答が多かった。これは回答者の多くが留学生なので、取るべき科目あるいは取りやすい科目がこの2分野に集中したのであると思われる。留学生の場合であれば、日本研究プログラムが中心となることは間違いないが、いずれにせよ、今後は、専修言語と研究プログラムの一体性を高めていくように、研究プログラムの設計を再考する必要がある。

II 教育課程について

	①そう思う	②ある程度 そう思う	③あまり思 わ ない	④思わない	⑤わからな い	(無回答)	合計
1.自分の興味や関心に従って、授業科目を履修することができたと思いますか。	29	11	1	1	0	0	42
2 卒業するにあたって、この4年間で十分な語学学習ができ、語学力が身についたと思いますか。	19	20	2	1	0	0	42
3 社会で必要となる教養や専門知識など身に付けることができたと思いますか。	24	15	2	1	0	0	42
4.自らが学びたいという姿勢、主体的に学ぶ力は身についたと思いますか。また、卒業後も、自ら学ぶことのできる力が身についたと思いますか。	24	16	2	0	0	0	42
5「基礎演習Ⅰ」から「日本語表現法Ⅳ」までの日本語リテラシー科目は、様々な学修を行っていくうえで必要だと思いますか。	23	14	2	1	1	1	42

設問1は、「そう思う」「ある程度そう思う」と肯定的回答した学生の割合は95.2%である（「あまり思わない」1名、「思わない」1名）。教養科目や専門科目などを通して、学生たちが必要とする知識や教養を身につけることができたと評価していると考えられる。

設問2の語学力については、本学の語学教育課程において、「そう思う」「ある程度そう思う」とある程度以上の語学力を身につけることができた肯定的回答した学生の割合は92.8%にのぼり（「あまり思わない」2名、「思わない」1名）、設問4と関連するものと考えられる。

設問3は、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答した学生の割合が92.8%であった（「思わない」が2名、「思わない」1名）。上述の専修言語のアンケートにみられたように、専修言語と研究プログラムの主体的学修意識が醸成されており、学びたいことが学べたとする卒業生がほとんどであったということであろう。

設問4は、大学教育の本質的役割の問いであるが、「そう思う」「ある程度そう思う」と肯定的回答した学生の割合は95.2%である（「あまり思わない」2名）。ほとんどの学生たちは主体的な学修に取り組める自信を持って卒業してくれたと言えるだろう。

設問5の、初年次導入科目ならびに日本語リテラシー科目（1年次～3年次必修）の必要性については、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答した学生の割合が88.0%（「あまり思わない」2名、「思わない」1名）であり、この分野の必要性はおおむね理解されているようである。

以上により、教育課程の設問については、全体として高く評価されていると受け止めて良いと考える。

Ⅲ 大学生活について

	①そう思う	②ある程度 そう思う	③あまり思 わ ない	④思わない	⑤わからな い	(無回答)	合計
1.学業にやりがいを持って取り組むことが できたと思いますか。	26	14	1	1	0	0	42
2.自分の大学生活(学業以外)は楽しかっ たと思いますか。	23	10	9	0	0	0	42
3.授業内外、課外活動などで教職員との 接点を持つ機会はあったと思いますか。	22	11	7	0	2	0	42
4.在学中の交流はできましたか。	19	17	4	1	1	0	42
5.全体的に大学側のサポートは適切でし たか。	21	16	1	1	3	0	42

設問1の学業面について、「やりがいを持って取り組めた」とほぼ肯定的な評価が寄せられており95.2%となっている（「あまり思わない」1名、「思わない」1名）。この数字をみれば、全体として充実した学業生活をおくることができたと思えている学生がほとんどだと考えて良いだろう。

設問2の大学生活全般については、①と②を合わせ、「楽しく過ごせた」と肯定的な評価が78.5%となっているものの、③「あまり思わない」も9名（21.4%）と例年になく多かった。これはコロナ禍の影響によるものと考えられるが、全体としては、充実した大学生活（学業以外でも）をおくることができたと思えている学生が多かったと考えて良いだろう。

設問3は教職員との距離感をたずねているが、これは78.5%と、昨年9月卒業生（82%）と比べてかなり下がっている（「あまり思わない」7名、「わからない」2名）。これもコロナ禍の影響があるかもしれない。少人数、教員と学生との近さ、接点の多さをアピールしていることから、この評価を失うことのないようにすることが重要である。

設問4では、日本人学生・留学生を含め、学生間の交流についてたずねている。設問は「在学中の交流はできましたか」とやや抽象的な質問となっており、留学生との交流（日本人学生にとって）、日本人学生との交流（留学生にとって）、また留学生同士、日本人学生同士を分けずにたずねた。どのような交流を思い描いて回答したかは明確ではないが、少なくとも数字から見れば、「そう思う」「ある程度そう思う」の肯定的評価の割合は85.7%になっており（「あまり思わない」1名、「思わない」1名）、昨年9月の89%と比べるとかなり下がっており、これもコロナ禍の影響かと思われる。この点を除けば、学生同士の交流はおおむね積極的にははかられたようである。

設問5も曖昧なはずねかたであるが、「そう思う」「ある程度そう思う」の回答は88.0%であり（「思わない」1名、「わからない」3名）、昨年9月の96%よりも下がっている。回答の結果からみれば、4年間学んだ大学に対しておおむね肯定的な評価判断を下しているといえよう。

設問1、5は肯定的評価が90%を超えたものの、設問2、3、4については、70~80%台に留まった。全体的に肯定的評価が下がった要因は、やはりコロナ禍の影響ということではないかと推察される。

IV 自由回答について

自由記述では大学への好意的なコメントが多かったものの、いくつか厳しいコメントも寄せられている。今後の参考のためにいくつか、抜粋しておきたい。

「小中高では外国人とはあまり触れ合うことがなかったですが、大学で色々な外国の方と友達になれました。卒業した今でもたまに連絡を取り合ったり、会ったりするので、この出会いを大切にしたいです。」

「RAのようなグループの存在は重要だとおもいます。RAの経験は私のような留学生にとって、素晴らしい思い出だと思っています。」

「外大の先生たちはとても親切でした。どんな困難や迷いがあってもたくさんのアドバイスをくれたり、相談したり、とても感動でした。長崎外大の皆さん、学生も先生も、きっと忘れられないいい記憶です。」

「コンピュータが遅い」

「本当に学校側の手助けが必要な時に助けてくれる大学ではなかった気がする。国際協力もイベントを計画するだけではなくて、アフターサービスをしっかりしてくれないと長い国際協力の効果がないと思う。例えば、カンバセーションパートナーなど。」

毎年のものであるが、このアンケート結果をもとに問題点や課題について点検し、修正・改善することによって、より良い教育環境及び学修生活環境を実現していくことが本来の目的であることを確認しておきたい。

2020年度 教育支援部長

小鳥居伸介

2021年5月10日